

学生たちがマチに出かけ大人に出会い、 感じたことを表現し、形にしていく。 そのサポートをしたい



會田 真己 (あいだ まき) さん

日本工学院北海道専門学校建築学科教員／一級建築士

1985年積丹町美国生まれ。同校卒業後、積丹町役場商工観光課で3年、日本都市設計（株）で13年の勤務を経て2021年から現職。建築材料、構造デザイン、福祉住環境、設計実習などを担当。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。26回目となる今回は、自身が卒業した日本工学院北海道専門学校（登別市）の建築学科で、地域に入って多様な大人と出会う場を作り学生たちを成長させることに心を砕く教員、會田真己さんです。

登別で建築を学ぶまでの道のりを教えてください

積丹町で中学まで育ち、美術が好きだったので札幌の高校へ進みました。周りには天才？と思えるようなすごい同級生がたくさんいて、美術で食べていくのは

無理だと判断し、高3の時に建築の道を志しました。ただ、美術科の私は数学を学んでいなかったため、美術系以外の大学進学は難しいと気が付きました。そこで道内・専門学校・建築学科という条件で探し、札幌と登別の2つまでに絞りました。そしてオープンキャンパスに参加し、海も山もあり勉強に集中できそうな登別を選びました。海が見えずビルに囲まれた窮屈な札幌での3年の暮らしがかなりストレスだったので…。どこで学ぶかが大事だと思ったのです。

2年間の学生生活はいかがでしたか？

勉強と寮での友達とおしゃべりが楽しかったですよ。先生たちから与えられるものを受け止め、こなしていました。ただ車も自転車も持っていなかったので、

寮からの徒歩圏内の狭い中で暮らし、学校の行き帰りのスクールバスから街並を見ているだけでした。登別温泉にもカルルス温泉にも、スキー場にも行かずに2年間を終え、登別市を広く知れなかったことは、今となってはもったいなかったですね。当時は町を知ろうという考えさえありませんでした。専門学校は忙しいとはいえ時間もたっぷりあったのに、もっと外に目を向けるような気持ちがあればよかったですね。

積丹町役場に勤めたのは、地元に戻りたかったから？

いいえ違います。卒業時は就職氷河期で、女性が建築関係の職種に就職するのがかなり困難でした。そのため、公務員の道しか残されておらず、なんとか複数の公務員試験に受かりました。給与が高い方を選んでしまうと、建築の世界に戻れなくなるのではないかと思います。給与が低いが将来の転職に役立つ可能性があるかと当時の私は考え、基礎自治体を選びました。結果的に出身地の積丹町役場に入りました。配属は専門の建築ではなく商工観光課に配属されました。町のイベントなどに関わり地元のお母さんたちに、かなり鍛えられましたね。それなりにハードでしたが充実した日々でした。ただ、当初から決めていた3年間で退職しました。

建築設計事務所への就職が決まって役場を退職？

いいえ、決まらずに退職しました。積丹町で仕事をしながら次の職場（建築関係）を探すのが当時は難しかったのです。最寄りのハローワークは余市町で車で30分以上かかりました。親に頼らずに一日も早く建築の仕事につくためには、就職の情報が集まり、夜間に資格取得も可能な札幌に出るしかなかったのです。アルバイトを掛け持ちして、情報収集と資格取得を8か月必死にしていました。当時通っていた資格の学校に求人票が掲示され、12月24日に面接を受け26日に合格の電話連絡をいただき、やっと次の道が見えました。

合格したのが前職の設計事務所だったのですね。

はい、そうです。せっかく覚えたCADも3年間使っていない23才の私を採用してくれたのはご縁と運があったと思います。工学院の学生時代に見学した竣工

したての公共施設（登別市の葬祭施設）の設計が、その会社のものだったこと、その時の印象を面接でアピールしたのです。建築の仕事をしたという願いを受け止めてくださった結果だったと感謝しています。公共施設の設計が得意な会社で13年仕事をさせてもらいました。

教員になろうと思ったきっかけは？

仕事をしながら一級建築士取得を目指し、合格したら大学に行きたかった自分の夢を実現するために通信の大学に入ろうという目標をもっていました。たまたまコロナの時期だったため、スクーリングがオンラインとなり、その浮いたお金で教職を取ることにしました。学ぶ中で“可能なら教育の現場に身を置きたい”という願いと、日々の仕事の中で強く感じていた“技術者を育てたい”という使命感も生まれてきました。この両方をかなえられる職場はないかと大手求人サイトで探していたら、母校で建築科教員募集をしていることを知ったのです。

今後についてお聞かせください。

学生時代お世話になった吉田幸恵先生（現在登別市でナスノサチエ建築設計事務所を経営）のように、学生に寄り添い、一人一人の輝く才能を見つけ引き出しながらも自主性を重んじる教員になりたいです。景観診断でご縁ができたカルルス温泉はじめ、地域と学生が関われる場所や機会を作っていきたい。吉田さんが関わっているカルルス温泉でのアートプロジェクトにも何らかの形で携われたらなと考えています。

（2024年1月取材）

インタビュー後記

會田さんと出会ったのは2022年の秋、建築学科の学生たちと行った登別市カルルス温泉の景観診断でした。都市計画の授業の一環で、カルルス温泉地区を舞台に、旅人目線で景観を整えるための提案型プロジェクトの指導者として準備から講義、現地学習、発表まで共に取り組んでいます。會田さんの学生との距離感が絶妙で、熟考する学生に寄り添いじっと待つ姿が印象に残りました。今後は卒業後のキャリア形成など含め、後輩たちにアドバイスする場面が増えそうな予感がしています。

かとう けいこ（株）まちづくり観光デザインセンター代表